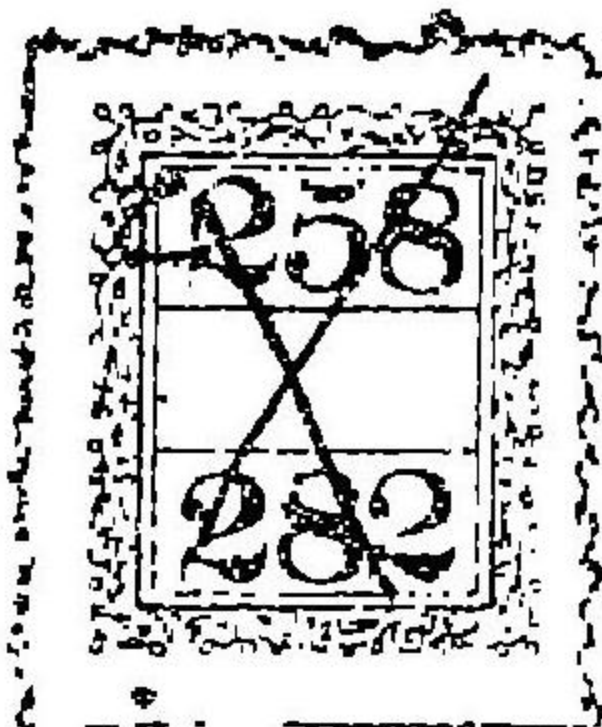


特71

936

基督の人訓



301479-001-2

特71-936

基督の人訓

牧野 虎次 / 著

M40.11

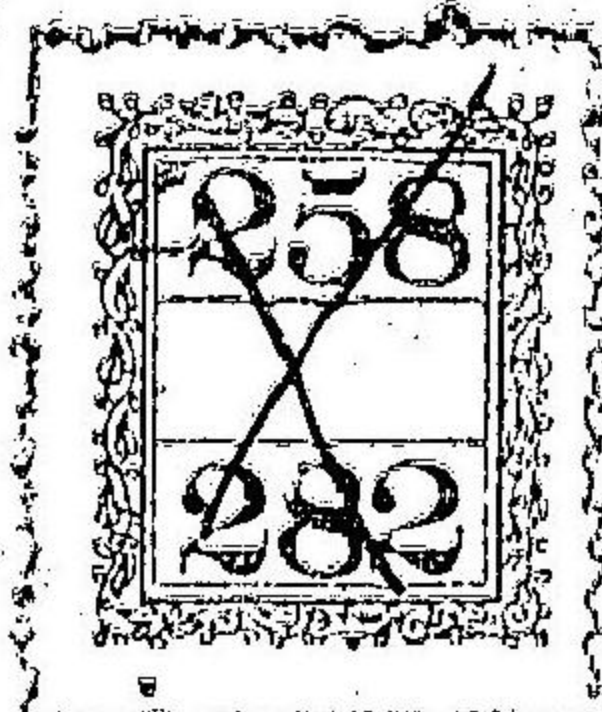
ABI-0001



特 71

936

基督の
人訓



一二 神子の特權 一三 人格の超越

第三章 人の人たる使命……………二八一—三四

一四 人格と使命 一五 人生の趣味

一六 矯風の大義 一七 人生の光明

一八 人格の光耀

第四章 人の人たる本領……………三五—四九

一九 舊法と新法との對照

二〇 對照第一例 忿怒

二一 對照第二例 姦淫

二二 對照第三例 背約

二三 對照第四例 仇敵

二四 對照第五例 愛敵

二五 人としての理想

第五章 理想の人……………五〇—六一

二六 修徳の理想 二七 救恤の本義

二八 祈禱の眞髓 二九 祈禱の模範

三〇 斷食の精神 三一 蓄財の理想

三一 理想と靈覺 三三 脫俗の生涯

三四 趣味の涵養 三五 人としての本領

三六 安心立命

第六章 同情の人……………七一—七八

三七 寛容の徳 三八 寛容と常識

三九 至誠と天佑 四〇 同情の原則

特刊
936

永久の間

目次

第七章 躬行の人 七九―八五

四一 躬行難 四二 交友難

四三 頂門の一針 四四 人格の完成

第八章 跋論 八六―八八

四五 人格の權威

目次終

基督の人訓

牧野虎次 著

第一章 序論

一 「人多き人のなかにも人ぞなき、人となれ人、人となせ人」と古人の歌ひしも宜なり、學者なきに非ず、智者なきに非ず、富者なきに非ず、されどいづくに人らしき人を見るべきか。親としても子としても、夫婦としても、骨肉としても、又は朋友としても、或は社會の一人としても、更に一步を進めては、仰で天に對し俯して地に向ひ、自ら省みて何の耻る處なく、これこそ完全無缺の人物なれと稱

第一章 序論

二

し得べきもの、果して何處に求むべきか。昔し希臘の哲人が、白晝燈火を提て街頭に立ち、我は人を探しつゝありと揚言せしは、そのこと奇矯に似たれども、その精神まことに諒とすべきものあるに非ずや。古に於て然りし如く、今も尚ほ人らしき人を求むること難し、さればこそ人格修養の問題は、いづれの時代に於ても肝要なれ。如何にして人の人たる資格を全ふし、其使命を果し、其本領を發揮して、この世に生れ甲斐ある者となるを得べきか。立身出世の問題に非ず、得失利害の條件に非ず、畢竟これらは人生の方法か手段に過ぎざれば、たとひその解釋に成功すればとて、人生の成功と云ふべきに非ず。人の人たる本領を明かにし、萬物の靈長たる目的を達し、始めて生を此世に享けたるを感謝し得べきに非ずや。されば人格修養の問題は、時代と境遇とによりて異なるべきに非ず、これ實に永

不朽の文

久の問題にして、何人と雖も常に念頭に存すべきなり。
 二 永久の問題に對しては、不朽の解釋なかるべからず、基督の聖訓即ち是なり。曰く人の人たる本領は、人と人との相對的關係に基かずして、天の父なる神に對する絶對的關係より生ずと。かのオーゴスチンが名著懺悔中の名句に「神より生れたる人の靈は、神に歸らざれば満足する能はず」と云ひしは、則ち限ある人間は限なき神に對して、始めてその本領を發揮し、真正の安心立命を得べきを云ひしなり。蓋し人格の眞意は、限あるものの中に、不朽不磨の靈的存在者あるを認めて後に、悟るを得べきものにして、唯物的利己主義の考にては、到底了解すること能はざるものなればなり。世の人格修養を口にするもの、根本的誤謬は、人格の上達が修養の結果なるを辨へず、これを目的とするにあり。これを目的として人格の修養

をなすは畢竟する所自己を中心として、自己の上達を期するものにして、非人格の根本こゝより發するなり。かの口癖の如くにいつも修養を云ふもの、往々にして意外の失敗を來すは、この根本義を誤るによるにあらずや。

基督の教訓はこれと異なり、其主旨とする處は己を棄て、天父に歸り同胞の爲に奉事して此世を天父の聖意に協ふ神の國となすにあり、曰く己の生命を全ふせんと欲するものはこれを失ひ、その生命を失ふものは之を得べしと。修養の修養たる本領は、己を忘れ、身を忘るゝにあり。かの古人が眞の孝は孝を知らず、眞の忠は忠を知らずと云ひたりしは則ちこれなり。基督の心を以て心とするものは天の父なる神に對して、子たるものゝ本分を全ふし、如何なる境遇に處しても、如何なる事情に遇ふとも、其心事は時と處とによりて

二三にせらるゝことなく、相對するものゝ如何によりて、その喜憂を左右せらるゝことなく、心靈常に天父の聖前に咫尺して、居處常に別天地を開拓するを得べし。人間幸にこの境遇に進まば、所謂貧賤に居るの道を知り、また富貴に居るの道を知り、飽ことも飢ことも、豊ことも歉ことも諸の事に於て熟煉したるものにして、その境遇を超脱して、俗界また天上の樂を専らにするを得べし。基督の教訓は則ちこれなり、管に人の境遇を問はざるのみならず、またその時代をも問はざるなり、天を相手とし、神意を奉戴するを以て根本となす基督の人訓は、いづれの時を問はず、いづれの處を問はず、これを中外に施して謬たず、これを古今に通じて替らざるものなり。聖書が千九百年を経たる今日、尙ほ世界各國の老若男女の心靈を司導しつゝある所以のもの、誠に故ありと云ふべし。

三 新約全書の全体はいづれも基督の教を基とせざるなし、しかも基督の教は人生の各方面に互り、その覆ふ所のもの又廣し。されど若しこゝに人格の修養に關する基督の教訓の粹を知らんとする者あらば、宜しく馬太傳第五章乃至七章に互る、基督が山の上にて人々に教へ給ひたる、所謂山上の垂訓を讀むべし。

山上の垂訓は、人を靈的存在者と認めて、その靈能を發揮せしめんとせるものなり。人を以て神の子なりとして、天に在す父なる神を模範とすべきを教へたるものなり。人格の修養は、自己を標準とするに非ず、他人を目的とするに非ず、暗きにも明きにも、人の知るにも知らざるにも、常に在し常に知り給ふ、父なる神の聖前に於てこそ爲すべきものなれば、山上の垂訓の主旨とする處なり。されば人間たるの本分は、父なる神の榮光を彰はすにあり。人間とし

ての目的は天の父の完全が如く完全なるにあり。斯くて人の地上に於て成し能ふ最善事は、天に財を蓄ふるにあり。人の世にあるは衣食の奔走に營々たるべきに非ず、天父の聖意を求めて、その指示する處に従ひ、何の顧慮する所なく、何の煩悶する處なく、常に感謝の生涯を送るべきなり。己にこの用意あり、他人に對すること尙ほ自己を思ふが如く、「人に爲られんと欲ふことは、その如くこれを人にも爲し斯くて人を見ること己の如く、己に對すること人に對するが如く、神我が父なれば、人は我が同胞にして、世界は則ち我が家なり。」我が父の家には第宅多しと稱せられたる基督の聖旨も、爰に到り始めて悟るべく、我が生涯は恰も千歲動くことなき大磐石の上にて建られたるが如くなるを得べし。これ實に山上の垂訓の大主意にして、人格の修養こゝに至つて成就せりと謂ふべし。

垂訓の性質

四 基督の山上の垂訓は、馬太傳に隨へば一場の説教の如くに見做さると雖も、路可傳に據れば、こは基督が各處に於て教へられたるもの、如し。聖書學者の研究の結果も、またこれを基督が一回に述べられたるものとはなさず、様々の場合に於て、或は一般世人に對し、或は彼の弟子等に對して教へられたるものを、基督世を去り給ひて後、その弟子が蒐集して、こゝに山上の垂訓を編纂するに至りしなりと云ふ。されどこは山上の垂訓の不朽の價値に何の影響を與ふることなし。恰もかの嵐山の風景が一幅の畫帖の中に縮められたる如く、或は芙蓉の峯の眺望が、書齋の窓の中に收められたる如く、たとひその距離と遠近との別はあらずとするも、こゝに全体の調和を得て、その美觀を賞し得べきなり。斯の如く山上の垂訓も其編纂上に、全く弟子等の故意に筆を用ゐたる跡なく、宛ら一場の説

垂訓の特色

教となりて 前後に一貫したる一大旨意の有する處あるを見るべし。その一大旨意とは則ち人の人たるべき、人格の修養を、神の子たる見地より教へられたるものにして、時と處によりて變ずることなき萬古不易の教訓たるなり。

五 人格の修養は則ち箇人的問題にして、社會的國家的の問題にあらず、山上の垂訓の特色はその個人的なるに存す。靈を全ふするは人を全ふする所以にして、人を救ふは則ち社會を救ふなり。基督は人の社會に對する義務を閑却せず、されど世の論者の唱ふるが如く社會問題を解釋せば、人間は自ら幸福たるべしとは云はず、却て靈を救はば人は則ち救はれ、世は自ら樂境たるに至るべしとは、則ち基督の根本義なり。「人はパンのみにて生るものに非ず、唯神の口より出る凡の言に因る」とは則ち彼の教訓の前提なり。吾人先づ靈的存

在者たることを悟らば、吾人は肉によりて活きず、靈によりて活るものたるを知るべし。衣食の問題はなくてはならぬ問題に非ず、なくてはならぬは我が人間としての本分の問題なり。爾曹先づ神の國と其義とを求めよ、さらばこれらのものは皆爾曹に與へらるべしとは則ちこれにして、吾人が山上の垂訓に學ぶ所は、生活問題乃至社會問題に非ず、その問題に對する我が心靈の態度、則ち人格の修養に存するなり。

然るに論者往々この特色を認めず、却てこれを以て社會的教訓となすものあり。例せばこれを以て社會に存する階級を無視し、社會の秩序を破壊するものとなし、或は惡に敵する勿れとの教訓を以て、絶對的に戰爭を否認し、或は人を議する勿れとの教訓を以て國家の權能に屬する裁判の制度を批難し、或は人に爲られんと欲ふことを

人にもその如く爲よとの教訓を以て、家族制度を非法となし、一切無差別を主張するが如きは、いづれも本訓の特色を察せざるより起る誤解なりと云ふべし。如何なる教訓たりとも、その大主旨を明かにせざれば、文句に拘泥して甚だしき誤解に陥ることあり、大觀達觀の要こゝに於てか知るなり。

第二章

人の人たる資格

心の欲しきものは福なり、天國は即ち其人のものなればなり。哀む者は福なり、其人は安慰を得べければなり。柔和なる者は福なり、其人は地を闊くすることを得べければなり。餓渴くことく義を慕ふものは福なり、其人は飽くことを得べければなり。矜恤あるものは福なり、其人は矜恤を得べければなり。心の清きものは福なり、其人は神を見ることを得べければなり。義きことこの爲めに賞らるる者は福なり、其人は神の子と稱らるべければなり。義きことこの爲めに賞らるる者は福なり、天國は即ち其人のものなればなり。我が爲に人なんぢらな諷諄また迫害いつはりて各様の悪言をいばん、其時は爾曹福なり、喜び樂め天に於て爾曹の報償多ければなり。そは爾曹より前の預言者をも如此責めたりき。

(馬太傳五〇三—一二)

六 高に登るは卑よりす、人の人たる資格は自己の足らざるを知るを以て第一とす。この謙遜の心懸けありて、初めて向上の途に就くを得べし。山上の垂訓が劈頭第一に「心の貧しきものは福なり」と云ふは、虚心平氣の狀態こそ、理想の境涯に入るの必用條件なれと云ふものにして、謙遜を以て徳に進むの第一門となすなり。先づ自ら屈するものにあらざれば、後に大に伸ぶること能はず、卑に就くことを潔しとせざるは、則ち高に登るの志なき所以ならずや。世の道に志し、初めて信仰の教に來るもの、動もすればこれを他人に擬し、或はこれを以て我が家族に期し、或はこれを以て世の人々に冀ひ、而かも己れ自身の反省に到つては興り知らざるもの、如し。斯の如くにしては、たとひ何年間道を學ぶと雖も、これを自得すること能はず。凡そ人苟も道に進んばせば、凡ての教を我が身にひき

あて、自ら責め自ら匡し、及ばざる所あるを懼るゝを要す。然るに世人が道に對する通例の態度を察するに、恰も垣根越しに、密かに庭内を物色するものゝ如く、少しく窺ふて忽ちに去り、遂にその全班を知ること能わざるなり。人の人たる道に進んどせば、吾人は先づ門を過ぎ相當の手續を経て其庭内に進み入るべきが如く、心を虚ふし先入の謬見を去り、萬事を我が身にひきあて、自ら顧み自ら勵まし自ら進まざるべからざるなり。

爰に「天國は則ち其人のものなればなり」と云ふは、神の聖意の行はるゝ理想の天地を指せるものにして、所謂樂園と云ひ極樂と云ふものなり。天國は則ち天意の行はるゝ所なれば、私意を挟み私情を恣にするものゝ居るべきところには非るなり。この私意私情を脱却せるものこそ、こゝに所謂心の貧しき人にして、天國に相應しき幸福

安心の道

なる人と云ふべけれ。

七「悲むものは福なり、その人は安慰を得べければなり」とは苦勞人に非れば慰安を得ること能はず、たとひこれを得るとも、決して樂むこと能わざるを云ふなり。慰安は人々の冀ふところ、而かもこれを得るもの稀なるは、これを得ることの難きにあらず、これを樂むことを知らざるに因るなり。太なる慰安は大なる悲哀の後に來ること、尙ほ産の苦の後に愛兒を得たる歡あるが如し。辛酸を嘗めて後ち、初めて慰安の何たるを悟るは、恰も運動の後に美味の何たるを悟り得るが如し。世人これを察せず、辛酸を避けたらば、慰安を得べしとなし、百方其策を講ず、これ實に木に縁つて魚を求むるが如く、到底不可能のことならずや。

親の爲に苦勞して、初めて孝子たることを得べく、孝子にして初

て人の子たるの樂を悟るべきなり。人の子として親をうらみ親に不平あるは、これ親の爲に苦勞することなきが爲なり。斯の如く人の親として親たるの特權を樂み得ざるは、子の爲に苦勞することなきが爲なり。我が子の爲に苦勞すること尠きものは、親たるの慰安を悟らざるものなり、夫婦の愛、朋友の情皆また然り、苦むことの程度は、慰めらるゝことの多寡を知るの尺度なり。豊饗に人事のみならず、世の爲め社會の爲に盡瘁すること多きものは、これによりて慰安を得ることも多く、事業の爲め學藝の爲め其身の勞を惜まざるものは、これによりて慰めらるゝことも多く、宗教の爲め信仰の爲め、哀むことの多き者にして、初めて心靈の慰安を解すべきなり。基督は悲みの人なりき、されど基督の慰安は吾人の度り知るべからざる程に大なりしなり。慰安は必ずしも我が苦勞の報酬に伴ふを要

せず、他人の賞賛以外別に心中無上の樂を悟るに非れば慰安の何たるを解せざるなり。辛酸を嘗むるは慰安に至るの途なり、それは慰安は心意の活動の結果にして、其活動の足らざるものはこれを悟ること能はざればなり、安心の道豈に他あらんや。

以上の二句は、是を對句と見て、人格修養上の第一着と云ふを得べし、則ち先づ自ら省みて前非を悔み、自己の足らざるを悟るの狀態を示したるなり。斯くて猛然志を起し、道に歩むの狀態は、次の對句に示さるゝを見るなり。

八 自ら省みて謙遜に、他人に對して勞を惜まず、悲哀の何たるを解する人は、更に寛仁大度の雅量なくんばあるべからず。一柔和なる者は福なり、其人は地を圃ことを得べければなり」とは則ち寛仁大度の人にあらざれば、その目的を達して最後の勝利を得ること能わざ

るを教えたるなり。由來ユダヤ人は流浪の民にして、自ら領土を有せず、空しく他郷に客となりて、不自由なる生涯を送れり、彼等が畢生の大目的は遂に領土を占有して、自家の邦家を建てんことにありき。國祖アブラハムも、立法者モーセも、その目的は則ち地を嗣ぎて國を建つるにありたりしなり。斯く祖先傳來の目的を全ふして、最後の勝利を握るには武力によるに非ず、政略によるに非ず、唯神によりてめぐまれたる、柔和なるものに非れば能はざるなり。夫れ柔よく剛を制するは、天地の理法にして、仁者に非れば勇者を服すること能わざるなり。蓋し柔和なる心情は無我無私を顯はす、無我無私は則ち真勇なり、「己の心を守るものは城を取るに勝る」とは、我利我欲に打勝つての意なり、先づ己に勝ちて、後ち人を服せしむるに足る、向ふ處敵なしとは則ち斯る人を云ふなり。恰も剛き及物を砥

ぐには、柔かなる砥石や磨革を用ゆるごとく、世の剛者を制するものは、則ちこの無私無我の柔かなる心情の外あらざるなり。穩かなる答は人の怒を解く、必勝の道は柔和と寛容にあり、何とむれば柔和と寛容なくしては、人の心靈を捉ること能わざるべければなり。如何にしてこの柔和なる心情を得べきか、蓋し我人格を修養せんとその熱心の爲めに、外來の妨害を顧るの餘地なきものにして、始めて其心を得べきなり。かの韓信が平然として市井の無頼漢の辱を受け、敢て其跨間をくぐりたりしは、彼の心中に前途の大望を宿し、その抱負活如として彼の胸裡に畫かれたるが爲に、眼中已に區々たる無頼漢なかりしが故なり。韓信の柔和は則ち韓信の心中、區々市井の徒の度ることを得ざりし別天地を有せしに因りて養はれたり。吾人若しわが衷にある熱心が、全く我が人格の修養に集注すること

を得ば、その熱心は則ち我をして忍耐と温和とを生み出さしむべし。寛仁大度は單に所謂お心好しの態度に非ず、鍛錬と修養とを経たる結果たるべきなり。

九 熱誠道に志すは則ち寛仁大度の半面なり、一饑渴如く義を慕ふものは福なり、その人は飽くことを得べければなり」とは道を慕ふこと、恰も餓えたるものが食をあさる如くに、必用物として熱心我を忘れて、慕ひ求むるを云ふなり。蓋し人の心霊はその肉體と同じく、斷へずこれを養ふの糧なくして、永く生存すること能はず、而してその靈の糧とは則ち神の義に外ならざれば、吾人が我を忘れてこれを慕ひ求むるは、當然なりと云ふべし、求道の志豈他あらんや。ことに注意すべきはこゝに「その人は飽くことを得べし」とある意義にしてその意は則ち満足することを得べしとこのことなり。饑渴義を

求道の志

慕ふものにして、衷情まことに綽々餘裕を有し、心より満足することを得べし。世には餓え渴く如くに財を慕ひ名を慕ひ、或は酒色を慕ふものあり、而してその人その熱心を増すに従ひ、其心情は益下劣となり、益目的物に近くに從ふて、益その心は不平と怨嗟とに充つるは、掩ふべからざる事實に非ずや。貪慾充つることを知らず、其風采までも不満足を現はすは、世の私慾に充つる人々の状態にあらずや。悪人には到底平和と餘裕なし、満足と喜樂とは遂に義人の占有する所なるべきなり。

人格の修養は自ら足らざる所あるを知つて、これを憂とするに始まり、寛仁大度と熱心我を忘るゝに至るとは、その切磋鍛錬を示し、斯くして鍛ひ上げ、磨き上げたる人格は燦然として其光を現はすに至るなり。以下述ぶる所の三ヶ條は則ち人格修養の賜を示すものな

仁者の心

りと知るべし。

一〇 一矜恤あるものは福なり、その人は矜恤を得べければなり」とは仁者に敵なく、接する者は悉く興する者となるに至るべきを示せるなり。世に友なきに非ず、唯己れ自ら進んで友とならざるが爲に眞正の友を得ること難きなり。われもし親を思ふ孝子の心あらば、子を思ふ親の慈愛を悟るべしと雖も、我が心にして放蕩兒の如く放埒ならば、親の慈愛は却て迷惑に感せられ、會ま以て我が心の不孝を激發せしむるに終るべし。子心なくしては親心を察すべからざる如く、人の矜恤を悟らんには、我が心に矜恤を解するの素養なかるべからざるなり。惻隱の心なきものは、君子を付度すべからざる如く、小人の心をも収むる能ざるなり。仁者に敵なし、如何なる相手をもこれを我と同化せしめて我が友となすを得べきこと、恰も良工には

靈覺の極

棄材なく、如何なる材木をも皆その性に從ひ、一々これを用ひて築ることなきが如くなるべし。人間もこゝに至つて、始めて萬民を友とし世界を横行闊歩することを得べきなり、斯る仁者の心こそ、實に人格修養上第一の賜なれ。

一一 人格の修養は靈覺の覺醒となり、限りある人間は遂に限りなき神を見るに至らざれば、その極度に達すること能わざるなり。見神の根本義は則ちこれなり、曰く心の清きものは福なり、その人は神を見ることが得べければなり」と。何となれば人は如何にその學問を磨き、その智識を進むるとも、依然として人たるに止まれば、これによりて無限絶對の神を測り知ること能わざるなり。されどその心靈清まりて、全く邪念俗情を脱却すれば、神より出でたる人の靈は、必ずや神を見に至るべし。古歌に曰く

わづかなる庭の小草の白露を、もどめて宿る、秋の夜の月。
 たいそれ葉末の白露のみ、されど其純粹なる滴には、天上の光を
 宿して、燦爛たるダイヤモンドの光を放つなり。人間の心霊もまた
 斯の如し、たとひ最微者の心霊たりとも、一點の汚れなく、寸毫の私
 なくば、是に明かに天父の聖意を悟を得べし。限りある人の子の衷
 にも、地に屬せざる神の肖像を藏むる以上は、肉情の擾亂を制して
 遂に明かに神を見るに至るべし。天に神あり、我に心あり、所謂一
 輪の明月丹心を照すが如く、我が心霊は慥かに天父の聖鑑に應えて
 感恩の念に溢るゝを得べきなり。これ人格修養上第二の賜なり。
 一二 仁者に敵なくして萬民を友とし、靈覺の極致に達して神を見
 るに至りたるものが、更に大なる特權は神の子として造化の化育を
 補け、萬物を保全する天父の靈能に參與するを得ることなり。一和平

神子の特

を求むるものは福なり、其人は神の子と稱へらるべければなりとは、
 この世に神の聖意に協ふ平和を來さんが爲に盡力するものこそ、始
 めて神の子と稱せらるべきものなれ、これなくば神の子と稱へらる
 るの價値なきものなりとの義なり。
 基督は則ち和平を來らせんが爲に、其身を十字架の上に殺して、吾
 人にその例を示せり。吾人は誰もこれにならひて、萬物を化育し、
 萬事を成就する、神の施設に興るべきなり。則ち世の爲に盡し、人
 の爲に務め、我が生れ出しことによりて、此世が幾分か神意に協ふ
 神國に近くことを得たらんには、我は則ち生れ甲斐ある生涯を送り
 たりと云ふべきなり。世より奪ひ、世より貪り、遂には世を賊して、
 空しく破壊的生涯を送るものは、此世に生れ甲斐なき人にして、惡
 魔の子とも稱すべきか、何となれば惡魔は萬物の成就を妨げばなり。

以上の三資格は人格修養の賜なり、斯くも高く美はしく築き立てられたる人の生涯は喬木風多しの譬に洩れず、動もすれば反對攻撃の目的となることあり、而かもその中にありて屹然として高く聳ゆる人格こそ尊けれ、次に述ぶる所は則ちこれなり。

一三 義ことの爲に責らるゝ者は福なり、天國は則ち其人の有なればなり世は己に屬せざるものを忌む、會ま世に忌まれて我生涯の高潔に向ひつゝあるを知るべし。人その友の爲に艱難を忍びて、眞にその友を得べきが如く、義ことの爲に迫害られて、始めて義そのもの、眞意を解するを得、我は則ち義ことゝ同化せらるゝを得べし。苦んで福なりとの實驗は、人格超脱の後ならでは悟ること能わざるは、かの人の子が世路の艱苦を嘗めて後ち、その實の親に譴責せられたるを想ひ出で、叱られたることのゆかしく轉た再びその心から

の譴責を慕はしく思ふと等しきなり。愛の中に懼あることなし、愛の爲には苦むことを樂む如く、吾人たとひ責められても義ことを樂んで、理想の境涯に入り、人格の超脱を見るべきなり。

更に一步を進め、單に義ことの爲に責めらるゝに止らず、その義ことは活ける人格に實現せられて、基督の爲に迫害を忍び、天父の爲に苦痛を嘗め、斯くて先哲古聖の跡を踐み、彼等と靈交を通ずるに至らば、身はたとひ迫害の中に圍まるゝとも、靈は則ち神と通じ、永生不朽の境に入るを得べし。斯くも我を驅つてこの境遇に進ましむるは、迫害の賜なりとせば、我は寧ろこれを歓迎せん。されど苦む爲めの苦は尊きにあらず、神の爲に苦み、義ことの爲に苦むことの尊きなり、徒らに事を好むは、人の人たる心事に非るなり。

第三章

人の人たる使命

爾曹は地の鹽なり、鹽し其味を失はば何をもつて故の味に復さん、後は用なし外に棄られて人に踐まるゝのみ。

爾曹は世の光なり、山の上に遮られたる城は隠るゝことを得ず。燈を燃して斗の下に置く者なし、烟壺に置て家に在すすべての物を照さん。

此の如く人々の前に爾曹の光を耀かせ、然れば人々爾曹の善行を見て、天に在す爾曹の父を榮むべし。

太五〇一三一—一六

人格と使命

一四 人格は必ず使命と伴ふ、使命なくして人格空しく存せざるは恰も運動なくして健康なきが如し。人格の修養は心靈の問題にして全く個人的なれど、其個人は社會を離れて存在すること能はず、人

人生の趣

格は社會に對する義務を飲きて修養すること能わざるなり。親たるの人格は子に對する務なくして養はるものに非ず、夫たるの人格は妻に對する責なくして修めらるゝものに非ず、理想の妻は必ずや理想の夫によりて發見せらるゝなり。かの世を離れ俗を脱して、獨り自ら清淨無垢を期せんとするは、人たるの道を盡さずして、人たらしんとするものにして、尙ほその身を縛して自由ならんことを希ふの類のみ。自然は眞空を思ひが如く、天理は使命なき空虚なる人格の存在を許さざるなり。されば人の人たる資格を有するものは、必ず人の人たる使命を忘るべからざるなり。

一五 爾曹は地の鹽なり鹽ありてこそ美味は生せめ、人らしき人の生存せる爲めに、社會は趣味ある社會とはなるなり。趣味なき家庭は和樂の美風を有せず、趣味なき人は人生の幸福を解することを得

す。されどこの趣味は決して放逸淫樂の謂に非ず、世を潔め人を益する心懸あるものにして、始めてその趣味を解し得らるゝは、尙ほ列車が軌道をはづるゝ事なくして、快駿なる運轉をなし得るが如くなるべし。道に従へば自由あり、道を外れば自由なし。人の人たる資格を備へて後ち、人生の趣味の何たるを悟るべきなり。

人格修養の志あるものが注意すべきは、世に對してこの趣味の使命を帯ぶることなり。和氣霽然として春風常に其邊を吹き、兒女と雖も近き親むの趣を備へざるべからず、威を以て他を壓し、傲然として人の近くを禁ずるが如きは、未だ人格の修養の足らざる者なり。

一六 「鹽もし其味を失はば、何を以てか故の味に復さん、後は用なし外に棄られて人に踐まるゝのみ」ユダヤ地方の鹽は山鹽にして時に其味を失ふことあり、物を潔めて腐敗を防ぐの力あるものも、一旦

其味を失ふときは、人のこれを顧るものなく、空しく道途に委棄せらるゝのみ。矯風の大義は則ち人格の修養にあり、自己の修養を全ふしてこそ、世道に益し人心を醫すことを得ぬ。基督が弟子等に對する最後の祈禱に「我かれらの爲に自己を潔む、これ眞理によりて彼等の聖られん爲なり」と仰せられたるは、社會を改善せんと志すものに取て、必然の模範を示されたるなり。自己を潔むるは則ち世を潔むる所以なるに、世人これを察せず、徒らに他人を教へて其用おられざるを憂ふ、これ自ら欺るものにして、誠その中になく、空しく虚偽の生涯を送るのみ、いかで他を正すべけんや。

一七 たゞに人生の趣味を解するのみならず、たゞに矯風の大義を全ふするのみならず、人の人たる使命は又人生の光明となりて、周圍の闇黒を照すにあるなり。謂ふこと勿れ燈火の光小なりと、唯一

臺のランプは室内を照らして、暗夜を制するに足らずや。たとひ外界は如何に暗黒を以て充たさるゝとも、星光燦として我が前途を照らさば、日暮て道に迷へる旅人も遂に行路の終に達すべきなり。

光は必ずしも大なるを要せず、如何に小くとも光明に二種なし、人格に兩様なし、小き光明は大なる闇黒に打勝つ如く、人格の感化力は常に周囲を照して止まざるなり。恰も數學に於て零を如何程多く累ぬるとも、これを以て數と稱するに足らず、たゞ一個の單位に敵すること能はざるが如く、非人格のものとはたゞ如何に衆くともこれを以て一人の眞人格に勝つこと能わざるなり。

科學の教ゆる處によれば、萬有界の凡ての光は其大本を太陽より發する者にして、かの太陽の光が植物を照りて植物を培養せしめ、その熱氣藏れて一時は潛勢力となると雖も、時を経たる後ち顯はれ

て、萬般の燃料となりその火力を傳ふるに至ると。人格も亦斯の如く、凡ての起源を天父の徳に歸すべし。基督が一青年に答へて何故我を善きと云ふや、一人の外に善きものはなし則ち神なりと仰せられたるは、則ち衆徳の基く處を示されたるに非ずや。人生の闇を照す人格の光明は、斷へず天父の榮光によりて養はれ且つ導かれざるべからざるなり。

一八 鹽となり光となるべき使命は、味なき物に味を與へ、光明なき處に光明を放ち、その大小多寡を問はず、各その分に應じ、神の聖意に従ふて其周囲を感化するにあり。鹽はそれ自身に美味を有するに非ず、他物に混合してその味を發揮せしめ、燈火は白晝に照るの必用なく、闇に照て始て燈火の功を知るべし。斯の如く人格は退て獨り自ら守る時に、其光を現はすに非ず、進んで他の爲に盡す時

に其光輝の燦爛たるを見るなり。近江聖人自ら其居室に掲ぐるの歌に曰く

いかでわれ心の月をあらはして、やみに住む世の人を照さん
これ實に先哲の遺志にして、後進たる吾人の繼承すべき大精神に
非ずや。

第四章

人の人たる本領

われ律法と預言者を廢る爲に來れりき意ふ勿れ、われ來て之を廢るに非ず、成就せん爲なり。
われ誠に爾曹に告ん、天地の盡さる中に、律法の一語も遂つゝさすして廢るべきなし。
是故に人もし誠の至微きを廢り、又その如く人に教なば、天國に於て至微き者さ謂れん、凡そ之を行ひ且人に教る者は天國に於て大なるものと謂るべし。
我なんぢらに告ん、學者とパリサイの人の義よりも、爾曹の義こそ勝れずば必ず天國に入るべき能はじ。

太五〇一七一二十

一九 人の人たる資格を有し、人の人たる使命を全ふしつゝあるも

のが、更に進んで人の人たる本領を發揮するに於て、辨へざるべからざるは、他人の奉せる宗教又は道德との關係なりとす。基督信徒たるものが、往々にして世人の誤解を招くは、則ちこの關係の明かならざるに因る。

基督はこゝに明言して曰く、我は世に在來せる律法と教を廢る爲に來らず、我來るは之を廢るに非ず成就せん爲めなりと。善ひ哉斯の言、これ則ち基督教は敢て從來の宗教道德を廢する爲に來らず、佛教の慈悲と云ひ、神道の清淨と云ひ、儒教の仁義と云ひ、孰も基督教はこれを大成して、其徳を完ふこそすれ、決して之に反對するものに非ず、なんすれぞ宗敵、法賊を以てこれを見るべけんやとの大主旨を示したるものなり。我に敵せざるものは、我に屬ものなりとの聖言は基督信徒たるもの、襟度を示して餘りあらずや。

爰に誠の至微き一を重んじて、これを守るべきことを命せられたるは吾人の尤も注意すべき所なり。世人動もすれば至微き誠を守ることを好まず、人の耳目を聳動するに足る大なる事のみ、之を爲んことを希望す。而も斯る大事は遂に來らず、朝夕爲し得べき小事は棄て顧す、善を爲の機會遂に來ることなし。蓋し誠意を以て小事に當らば、小事を以て大なる徳を積むべきを知らざるなり。近江聖人の語に「大善は名に近し、小善は徳に近し、大善は人争ひて爲んとす、名を好むが故なり、名によりて爲す時は大も小となる、君子は小善を積んで徳となすものなり、眞の大善は徳より大なるはなし、徳は善の淵源なり」と云ひしは則ち聖人たるものが平生の心懸の非凡なるを知るべきに非ずや。

基督信徒たるものはその人格に於て、世の學者と宗教家よりも、更

に一步を濯でざるべからず、理想の境涯に進んとせるものは、區々たる相對的の標準に甘んじて、小成に安んずべきにあらざるなり。是に於て基督は新き理想の生涯を歩める者の爲に、新舊の教を對照して、左の五例を擧げ、新法はこれ舊法を廢するものに非ずして、これを成就する所以なるを示されたり。

二〇

古の人に告て殺すこと勿れ、殺す者は審判に干らんと言ふことあるは、爾曹が聞し所なり。されど我爾曹に告ん、凡て故なくして其兄弟を怒る者は審判に干らん、又その兄弟を愚者よといふ者は集議に干らん、又狂妄よといふ者は地獄の火に干るべし。是故に爾曹もし禮物を携へて壇に往たる時、彼處にて兄弟に恨るゝことあるを憶起せば、その禮物を壇の前に留、先づ往て爾の兄弟と和し、後來りて爾の禮物を獻よ。爾を認ふる者と偕に途間にある時早く和げよ、怒くは認る者爾を審官に付し、審官又爾を下吏に付し、遂に爾は獄に入られん、我誠に爾曹に告ん、分厘までも償はざれば、必ず其所を出るべき能わするなり。

對照第一 忿怒

こは殺すべからずとの舊法を成就せん爲に、憤るべからずとの新法を立てたるなり。蓋し憤怒の情は、恰も惡魔が投げたる眼潰の玉の如く、人の常識を滅却して前後の辨を失はしめ、後悔遂に及ぶことなき失敗を來らすものなれば、茲に怒ること勿れとの新しき誠を興へられたるなり。何となれば怒るものは其衷心に於て、已に殺人罪を犯したるものなればなり。基督はこの怒ることなかれとの教訓を、同胞相愛するの誠意に基きて、根本的に人心に樹つべきを命じたるなり。神に對する第一の務は、則ち同胞相愛するにあるは、尙ほ親への孝行の第一は兄弟和睦むにあるが如し。禮物を以て神を祭るよりも、矜恤を以て同胞に接することが、神に對する大切なる勤なり。かくて人生を訴訟に譬へ訴ふる者と途にある時、則ち和解すべき機會ある間に早く和きて、悔とも及ばざる如きことなかるべ

しと教へられたるなり。

二

古の人に告て、姦淫すること勿れと言ふことあるは爾曹が聞し所なり。然ど我爾曹に告ん、凡そ婦を見て色情を起す者は、中心已に姦淫したるなり。もし右の眼爾を罪に陥さば抉出して之を棄ふ、蓋五体の一を失ふは、全身を地獄に投入らるゝよりは勝れり。もし右の手爾を罪に陥さば之を斷て棄ふ、蓋五体の一を失ふは、全身を地獄に投入らるゝよりは勝れり。また云ふことあり、凡そ人その妻を出さんとせば之に離縁状を與ふべし。されど我爾曹に告ん、姦淫の故ならで其妻を出す者は之に姦淫なましむるなり、又出されたる婦を娶る者も姦淫を行ふなり。

五〇二七一三二

こは人慾中尤も懼るべく誠むべき、男女間の淫慾に對して、舊法が單に姦淫を戒むるに對し、汚れたる思を懐くまじきを教へられたるものにして、これ實に根本的治療を示したるなり。ことに基督はこの情慾の熾んなる勢力を認め、之を人体の右手右眼に比し、たと

ひ如何に大切に思はるゝものと雖も、若しこゝに病毒の伏在するを發見し、これこそ我生命を危ふするものなりと悟らば、斷然これを處決して、毫も躊躇すべからざるを示せり。蓋し病毒の感染を悟らば、如何に我身に大切なるものと雖も、速斷速決、直ちに外科手術を用ゐざるべからざる如く、男女間の慾情は漸次に徐々と制御すべき性質のものに非ず、速斷速決、たとひ一時は苦とも、思ひ切つて斷然これを處分すべきものなり。

離縁問題に關してこゝに絶對的禁止を唱へられたるは、今日尤も注意すべきことなり。頃來説をなすもの動もすれば輒ち曰く、結婚は男女の精神相融和して始て成立するものなり、已に精神相離反すれば離縁するも又妨なしと。思はざるの甚しき哉、男女の別は心靈的よりも寧ろ形体的に存せずや、男女一体となればもはや二つに非

す一つなりとの原則は、肉体にかゝわるものにして、たゞ感情の合ふ合はぬの問題に非ず。離縁の弊害は獨り家庭の平和を破るのみならず、又人道をも亂る。こゝに離縁を戒むは則ち結婚を慎むべき所以なりと知るべし。

二二

また古の人に告て誓の誓を立つること勿れ、爾曹誓ふ所は必ず主に送べしと、言ふこと有は爾曹が聞し所なり。されど我爾曹に告ん、更に誓ふこと勿れ、天を指て誓ふ勿れ、これ神の座位なればなり。地を指て誓ふこと勿れ、これ神の足踏なればなり。エルサレムを指て誓ふこと勿れ、これ大王の京なればなり。爾の首を指て誓ふ勿れ、ちは一すぢの髪だに白し黒すること勿れ。爾曹たゞ是や否やといへ、此より過るは惡より出るなり。

五〇三三—三七

由來ユダヤ人は神國民を以て自ら居り、常住不斷に神名を呼ぶを以て誇となし、其弊終に虚禮的となるに至れり。彼等謂へらく主の

名を指して誓ひしことは、必ずこれを守るべしと。これ敢て咎むべきにあらず、まかも是が爲に神名を指さる誓は、破るも妨げずとするに至つては、人たるの道を誤れるの甚しき者と云ふべし。凡そ人たる者は然諾を重んじ、時と處を異にするも、決して違言背約あるべからず。爾の口より出る是々否々をして、常に信頼に償すべきものたらしめよ、さらば信用を尊敬とは自ら爾の門に集るべきなり。ユダヤ人は或は天を指て誓ひ、或は地を指て誓ひ、その指すものによりて、誓約の輕重を異にしたりき。今の世の人の誓ふや、或は署名實印を以てし、或は政府發行の印紙を以てし、或は公正證書の證明を以てし、斯て誓ふ所の約束に輕重の差別ありとなす。これユダヤの弊と相去ること幾何ぞや。理想の生涯を送んとするものは斯くあるべからず、重すべきは誓の精神にして、其方法に非ず、是は

是にして否は否なり、苟も一旦言明したる所は、徹頭徹尾これを全
ふしてこそ始めて理想の人と云ふべけれ。

二三

目にて目を償ひ、齒にて齒を償へと言ふこと有は、爾等が聞し所なり。然ど
我爾曹に告ん、惡に敵すること勿れ、人なんちの右の頬を批ば、亦ほかの頬
をも轉して之に向ふ。爾を認て裏衣を取んとする者には、外服をも亦さらせ
よ。人なんちに一里の公役を強なば之と償に二里ゆけ。爾に求むる者には與
へ、借んとする者を卻くる勿れ。

五〇三八―四二

舊法の命ずる所は、復讐敢て其度を越ゆべからずと云ふにあり。
基督はこれを更へて、一切復讐を禁じ、惡に抵抗すること勿れと命
せられたり。そは我若し他人に抵抗せば、其事情の如何なるに拘ら
ず、彼我ともに同じ境遇の下にある者にして、共に同標準によりて
審判るゝと知るべし。これ則ち我が彼に機先を制せられたることの

證にして、先手は彼にあり我は却て後手となり、我が運命は彼によ
りて左右せらるゝことを示せるに非ずや。惡に敵することなく、右
の頬を批るれば左をも之に向よとは、善を以て惡に報ひ、守勢を變
じて攻勢となし、形勢を一變して、我れ彼を制するに至るべきを教
へたるなり。保羅が言に「爾惡に勝たるゝ勿れ善を以て惡に勝つべし」
とあるは則ちこの事にして、これ決して惡に負るの義に非るなり。
人若し尋常規矩の命ずる所に從ひ、唯其範圍内に踟躕して生活す
る時は、これ則ち平凡の生涯にして、尋常一様のことのみ。されど
若し尋常規矩の命ずる範圍内に居るも、之に處する我精神にして、
尋常以上の活動あらば、我は平凡の生涯を非凡化するを得べし。一
里の公役を命せられて一里往くは、偶々以て我義務を盡せしに過ぎ
ず、何の誇る處我にあらんや、されど力をこめて義務以上のことを

なさば、我は則ち一里の命令以上に超越して二里往くものなり、斯
てこそ我は始めて尋常以上の天地に入るを得べけれ。

二四

爾の隣を愛みて其敵を憐むべしと、言ふことあるは爾曹が聞し所なり。されど
我爾曹に告ん、爾曹の敵を愛み爾曹を誼ふ者を祝し、爾曹を憎む者を善視し、
虚逆迫害ものゝ爲に祈禱せよ。如此するは天に在す爾曹の父の子ならん
爲なり、夫天の父は其日を善者にも悪者にも照し、雨を義者にも義からざ
る者にも降せ給へり。爾曹己を愛するものを愛するは何の報賞あらん、税
吏も然せざらんや。安否を兄弟にのみ問は人より何の過れたる事あらん、
税吏も然せざらんや。是故に天に在す爾曹の父の完全が如く、爾曹も完全す
べし。

五〇四三一四八

舊法の精神は敵を敵とするも、其隣を愛すべしと云ふにあり。新
法の主旨は其隣は云ふ迄もなし、其敵を愛して怨に報ゆるに徳を以
てせよと云ふにあり。恩に酬ゆるに恩を以てし、好意に酬ゆるに好

意を以てするは、何の發展かこれあらん。人の人たる所以は如何な
る者に對しても、其罪を惡んで其人を惡まず、蒙昧を善導し荆棘を
開拓して、人の世を神の國となすにあり。我に反對するものを善視
し、我を迫害するものゝ爲に祈禱してこそ、至愛至仁の天父の聖意
を奉戴するものと稱すべけれ。不孝の者を愛する親の情は、則ちこ
の神意を傳へられたるに非ずや。天に二日なし、一視同仁の愛を以
て、善人にも悪人にも、同じ日を照し同じ雨を降せ給ふ。その天の
父の聖意を承け、悪人を導き仇敵を化するは、神の子たる者のなす
べき所たるなり。

基督が世に來りしは醫師が病者を助ん爲に來りし如く、罪人を招
て悔改させんが爲めなりしなり。志士仁人が世に對して盡すべき處
のもの皆斯の如し、吾人の働が酬ひられざる所に、働き甲斐は存す

るなり。否れば吾人の爲す處は射利一遍にして、我慾をのみ計る苛
歛の徒と何の撰ぶ所あらんや。

人の理想

二五 是故に天に在す爾曹の父の完全が如く、爾曹も完全すべしと
新人の理想はこの一言にあり、苟も萬物の靈長として、この世に存
在する限り、その理想の標準は區々たる地上の人物にあらず、子と
して其親を習ふべきが如く、天父の完全なる標準を以て、我理想と
なすべきなり。標準こゝに定まりて、人がこの世に於ける大目的は
自ら樹立し、利害得失の間に超然とし、榮枯盛衰の爲に迷はざる、
ことなきを得べし。所謂人を相手とすることなく、天父を相手とし
て、こゝに迷はず惑はざる眞人間の生涯を送ることを得べし。恰も
太陽の光線が凡ての病毒を消滅せしむる如く、悪人の惡を咎むるこ
となく、聖愛を以てこれを善導する時は、如何なるものと雖も其徳

に化せられざるはなし。我若し親心を以て臨まば、凡てのもの自ら子
心を顯はすに至る、仁者に敵なしとは則ち此謂なり、豈樂しからず
や。

第五章

理想の人

信徳の理

二六

なんぢら人に見せん爲に、其義を人の前に行きこを慎め、もし然らずば天に在す爾曹の父より報賞を得じ。是故に施濟を行き人の榮を得ん爲に、會堂や街衢にて爲善者の如く、嫉を己が前に吹しむる勿れ。我まこさに爾曹に告ん、彼等は已にその報賞を得たり。爾曹施濟をするとき、右の手の爲こを左の手に知らずる勿れ、かくするは其施濟の隠れんが爲なり、さらば隠れたるに鹽たまふ爾の父は明顯に報たまふべし。

六〇一四

人の人たる本領は、外に見ゆる處に存せずして、内に藏るゝ處に存す、何となれば外見は内在の印影にすぎざればなり。保羅曰く我等が顧る所は見る所のものに非ず、見ざる處のものなり、そは見る

所のものは暫時にして、見ざる所の者は永遠ければなりと、人はその面を見れども神はその心を見る、徒らに外形を飾りて其内心を顧みざるものは、人に媚びて神を敬はざるものなり。人の前に其義を行んどせる者は、毀譽褒貶を以て其心を二三にし、志操常に一定せず、かの所謂風に撼されて翻る海の浪の如く他人の噂や、世間の批評によりて、浮動の生涯を送るに過ぎず、斯る者を指して無定見の人とは稱するなり。是故に基督は爾曹人に見ん爲に、其義を人の前になすことを慎め、もし然らずば天に在す爾曹の父より報賞を得じとは云はれたりしなり。

人の人たる信徳の理想は則ちこの目に見えざる天父の聖靈に對して時々刻々自ら匡し自ら勵むにあり、これに就て基督は左の三條の教を垂れ給へり。

救恤の本

二七 救恤の本義は物を興ふると共に心をも興へ、憐なる同胞を見るとき共に天父をも認め、人を助くると共に己れ自らの人格を磨くにあり、聖書に貧きものに興ふるはエホバに貸すなりとあるはこれを云ふなり。然るを是を以て自らの名を賣り、譽を求んが爲に、廣告的所行を爲すに至つては本來の根本義を没却し去るものなり。廣告は商賣にして慈善に非ず、商賣をなすに商賣の心掛を以てするは可し、慈善を行ふに商賣の心を以て之を爲すは、所謂偽善を行ふものにして、人格を傷るの甚しきものと云ふべし。

「右の手のなすことを左の手に知らずる勿れ」との教訓は、右の頬を批ば亦外の頬をも轉して之に向よとの教訓の如く、字句的に解釋すべきものならずして、之を精神的に解釋し、善を行ふて之を自覺することなく、恰も知らざるものゝ如き、虚心の態を指したるなり。

祈禱の真

如何なる親切も又贈遺も、興えたる者がこれを恩にきせたる時は、受る者の心に少しも感恩の情を起さざるなり。親しき問柄を隔つるものは、不相應なる高價の贈物なりとの俗諺は、則ちこの消息を傳へたるものか。如何なる物を施しても、之に伴ふ愛の心を興へずんば、眞の慈善に非ず。愛の心は則ち己を忘るゝにあり、己を忘るゝものは其善行を誇らず、善を行ふて然も自ら知ざるものゝ如し、人間こゝに至つてその爲す所悉く天父にめぐまるゝは宜なり。

二八 爾祈る時に偽善者の如くする勿れ、彼等は人に見られんが爲に會堂や街衢の隅に立て祈ること好む、われ誠に爾曹に告ん、彼等は己にその報償を得たり。爾祈るときは嚴密なる室に入り、戸を閉て隠蔽たるに在す爾の父に祈れ、然ば隠蔽たるに墮たまふ爾の父は明顯に報いたまふべし。爾曹祈る時は異邦人の如く重覆語を言なかれ、彼等は言多きを以て聽れんと思へり。是故に彼等に教ふこと勿れ、爾曹の父は求はざる先に其需用物を知たまへばなり。

夫れ人格なるものは、獨り自ら修養するのみに止らず、他人の身上を思ふて之を助るによりて上達するものなり。ひとり他人を救ふのみに止らず、更に天に對して盡す處あらざるべからず、祈禱則ち是なり。祈禱は人の心裡に伏在せる靈氣が地のものに満足せず、天に向つて永遠の糧を求むるの聲ならずや。斯くて奥床しき人は、其修養の途を天上に發見して、永遠の生命をたざるなり。

理想の人は靈的生活をなす人なり、人間以上の靈界に遊びて人知れず懼れ喜び且つ勵む人なり。祈禱は則ち斯の靈界の消息を傳ふるものにして、常に神を知るのみならず、神と偕に語り且交るは則ち祈禱の眞意にして、宗教的生活の奥義實にこゝに存す。この故に己が宗教的生活を以て、他に銜ふは、自家撞着の甚しきものと云ふべし。人に見せんが爲に祈るは、人に見らるゝが爲に熱信を裝ふもの

にして、神に事ふると稱して人に事へ、宗教によりて偽善を行ふものなり、かゝるものいかで人格の修養を語ることを得んや。

人は衣食住の生活のみにて活るものに非ず、實に靈界の呼吸によりて活ざるべからず。「肉によりて生るゝものは肉なり、靈によりて生るゝものは靈なり」魚は水中に泳ぎ、鳥は空中に飛ぶが如く、靈的存在者たる人間は、又靈界の呼吸によりて活べし。然るを唯物的世界にのみ棲息するものはこれを悟らず、畢生唯離悟として肉慾のみ追ひ求めて、遂に満足する所なし、これ求むる處を知らざればなり。人のものは人にかへせ、されど神のものたる人の靈は神にかへさざれば、遂に歸する處を得ざるなり。

我はよし他人に心腹を吐露せずとも、我が親き者に對しては包み藏す處なく、心の奥に秘めるもの迄語り明さんことを冀ふ。さらば

何ぞ一步を進めて萬事を塵給ふ天父に對して、我が思のたけを語らざるや、人と語るよりも多く神と語る人こそ、靈によりて活る神の子と稱すべけれ。斯くて地に住める我等も、天に屬する神の子と稱するを得べきなり。

二九

されば爾曹が祈るべし。

天に在ます我儕の父よ、願くは爾名を尊崇せ給へ、爾國を臨らせ給へ、爾旨の天に成さく地にも成せ給へ。我儕の日用の糧を今日も與へたまへ。我儕に罪を犯す者を、我ゆるす如く、我儕の罪をも免したまへ。我儕を試探に過せず。惡より探出し給へ。國と權と榮は爾の窮なく有らたまふ所なり。

アーメン。

爾曹もし人の罪を免さば、天に在ます爾曹の父も亦爾曹を免し給はん。されどもし人の罪を免さずば、爾曹の父も爾曹の罪を免し給はざるべし。

六〇九一五

こゝに擧げたる祈禱は、主の祈禱と稱するものにして、基督が弟

子等に對して祈禱の模範を示し給ふたるものなり。

神に對して天の父よと云ふ、この一語已に基督信者の祈禱の精神を示して餘りあり。人の至誠は必ず天に通じて、その應驗疑ふべきに非るは、父子の親情に照して明かなりとす。祈禱の第一義は天父を尊崇るにあり、吾人の畏敬すべきは鼻より息の出入する動物に非ずして、天地の主宰者たる萬能の神にあり。次で祈るべきは天意の成就せんことなり、我が願望を充たすは、必ずしも期すべきにあらす、家庭にまれ、教會にまれ、凡て天父の聖意の行はるゝ處は、これ則ち神國にして吾人の願ひ求むべきものに非ずや。かの幼兒が親に向つて要求する種々の願望は、必ずしも幼兒に必用なるものに非ず、されど親が彼の爲に慮る件々は必ずなくてはならぬものなるが如く、吾人が神に向て願ふ處は、吾人の勝手が間敷要求に非ずして、

聖慮我が身に及びて、我その命する所を行ふに至るべきことなり。
 更に祈るべきは、我等が肉体をも天父の保護に委ねまつりて、日用
 の衣食住は凡てその聖手より受んと祈願なり。我が身体と我財産
 と我家族とを、己が屬と思ふは慾心の迷にして、凡てこれ一時一刻
 も神の護を離て生存すべきに非ず、これを聖護に委ねまつりて、我
 は寸毫も心配なきを得るなり。更に祈るべきは我が罪の赦なり、罪
 とは善を知て之を行ふこと能わざると、惡を知て之を止ること能わ
 ざるとを云ふなり。この誠意誠心あるが爲に、他人に對して寛容の
 徳を現はすを得べく、猶ほ我自ら渡らんとせる橋梁を自ら壞つが如
 きことなき用意あるを得べし、蓋し人と和ぐは則ち天父に事ふる所
 以ならずや。終に祈るべきは、吾人が常に種々なる誘惑に臨みつゝ、
 あるを自覺し、我心身を天父の保護に托せんことなり。斯くて聖名

斷食の精

を頌めたへ、祈る處を終るに當り、我が誠意を表白するの志るし
 としてアーメン(原語にて誠心誠意との義)と唱へよとなり。

三〇

爾曹斷食するとき僞善者の如き寛容をする勿れ、彼等は斷食を人に見ん爲に
 顔色を損ふ、我まことに爾曹に告ん、彼等は已にその報賞を得たり。なんぢ
 斷食する時は、首に帯をぬり面を洗へ、かくするは爾の斷食人に見えずして、
 隠微たるに在す爾の父に現はれんが爲なり。されば隠微たるに隠たまふ爾の
 父は明顯に報ひ給ふべし。

六〇一六一一八

當時ユダヤ人は宗教上の熱心を現さん爲め、一週に二回宛午前
 間は斷食して神に事へつゝありしが、儀式を尊ぶ弊害として神に對
 する熱信よりも、寧ろ人に對してこれを誇り顔に、態と形容枯槁の
 状を呈して斷食を人に衒はんとせり。理想の人は斯くあるべからず、
 斷食中は特に其身をつゝし、國風に倣ひて橄欖油を髮に塗り、其

容貌を美はしくし、たゞ神に對してのみ斷食の誠意を捧ぐべし、敢て他人に誇り示すべきに非ざるなり。

斷食の習慣は今日稀に見る處なり、されど其精神たる克己獻身の主意は、今日に於て最も必用とする所にあらずや。己の慾を制し、己の肉に打勝ち、鍛鍊修養を積み、以て天父に近くは則ち斷食の精神なり。他人を救ひて同胞の義務を盡し、進んで靈界に呼吸しつゝ、あるものは、又己に克つて心身ともに天父に捧ぐるの用意と實行とを一日たりとも缺くべからざるなり。

三一 盗くひ誘くさり、盗うがらちて竊む所の地に財を蓄ふること勿れ、盗くひ誘くさり、盗うがらちて竊まざる所の天に財を蓄ふべし、蓋なんぢらの財の在るに心も亦あるべければなり。

蓄財の理想

理想の人たるべきものは、目に見へて、忽ち消え失する地上の財

六〇一九一三

に心を奪はるゝことなく、朽ちず廢れず、永遠無窮にその光を輝すべき、天の財を積むべし、これ則ち蓄財家の理想に非ずや。限りある人間が地上に於て成し得べき最上のことは、限りなく存する天上の財を蓄へて、永生に至るべき準備をなすにあり。蓋し地に積む財は、集れば則ち散じ、置けば則ち損じ、紛争擾亂随つて起り終にまた止むことなし。畢竟地の寶は用ゐて吾人の用を爲すに足れど、これを得るを畢生の目的となし、これを得んが爲には、凡てのものを犠牲とする程には足らざるものなり。そは地に蓄ふる財は人の身に屬くことなく、世にありて人格を養はず、世を去るとき人の靈を導くことなればなり。

天に財を蓄ふべし、そは爾曹の財のある處に心も亦あるべければなり、天父の聖前に我が人格を磨き、同胞の爲に全力を盡し、生活以

上の生活に於て、天の靈氣に感じ、更に克己献身の生涯を送るは、これ則ち永遠の生命の寶庫たる天に財を積むなり。斯る人は其身地には住めども、其心は天に屬して永生の途を歩めるものに非ずや。

三二

身の光は目なり、若爾の目瞭かならば全身も亦明かなるべし、もし爾の目暗からば、全身暗かるべし。是故に爾の中の光もし暗からば、其暗こそ如何に大ならずや。人は二人の主に事ふること能はず、そはこれを惡みかれを愛み、此を親み彼を疎むべければなり、爾曹神と財に兼れ事ふること能はず。

一六〇二二—二四

理想と靈魂

夫れ天地は光明に充つれども、我が目若し暗からば、我はその光明に接すること能わず、瞭然としてたゞ暗黒の中に居るに過ぎず。天父の恩恵は六合に盈れども、我が衷の光なる靈眼にして開かれずんば、我はその恩恵を知ること能わず、神の在すこの世に生れ出ながら、神を知らず又我を知らず、愁然として憂と悲の生涯を送ること

と、尙ほ親あれども親を知らず、友あれども友をしらず、徒らにひがめる心情を以て、人を疑ひ人を猜める者に似たるなり。靈眼を開きて靈界の真相を見よ、恰も芙蓉の峯が其麓は雲霧にとちらるゝも、其巔は永久の光に照らさるゝが如く、たとひ我が身邊は社會の様々なる出來事の爲に圍繞せらるゝも、我が心念は常に天父の恩顔を仰ひて、感謝の生涯を送るを得べし。理想の人はこの靈覺を有するの人たらざるべからず、靈覺の人は毎に天の榮光に接するの人たらざるべからず、毎に天の榮光に接するの人は、その衷情に天父の聖聲を聞くの人たらざるべからざるなり。然るに人の靈覺を妨げて、天父の聖聲を聞かしめざるものは何ぞや、これ人心の衷にひそめる貪慾私情の念にして、一括して云へば此世の財を慕ふの汚情に外ならず、この汚情こそ人をして二心あら

しむるものなれ。古來忠臣は二君に事へず、貞婦は兩夫に見えずと云ふに非ずや。たとひ其人如何に才藝あるも、如何に才色を備ふるも、もしその節操に於て缺くる處あらば、人の人たる本領は其人に許すべからざるなり。

抑も萬物の靈長たる人間の節操は、天地の主宰者たる神に事へて、正義の大道を歩むにあり。世の財寶に眩惑して、人の踐むべき道を過つは、則ち人としての節操を汚すなり。節操を汚したるものは、如何に此世の榮華を恣にするとも、それは不義の財を食ふものにして、人間として享くべき平和と安心とは即ちこれあるを得ざるなり。

三三

是故に我爾曹に告ん、生命の爲に何を食ひ何を飲み、また身體の爲に何を穿んと憂慮ふこと勿れ。生命は糧より優り、身體は衣よりも優れる者ならずや。爾曹天空の鳥を見よ、椋ことなく糧をせず、倉に蓄ふることなし、然るに爾曹の天の父は之を養ひ給へり、爾曹之よりも大に勝る者ならずや。爾曹

脱俗の生

のうち誰がよく憂慮ひて其生命を寸陰も延べ得んや。

生活問題は人間に取りて大切なる問題なりと雖も、しかも最上最後の問題に非ず、畢竟する所衣食住の問題は人間に取りてその身に副ふに過ぎざるなり。大海に泳る魚も口にする所は一杯の水に過ぎず、大木に止る鳥も握るところは一本の枝に過ぎず、身體の爲に財寶を蓄ふるも、その財寶は我が靈性の糧となること能はず人の生命は所有物の豊なるにはよらぬものなりとの聖言は、萬物の靈たる人の子の爲に、不抜不易の格言を述たるものと云べきなり。人の肉體が毎日の糧によりて養はるゝ如く、人の靈性は神の言葉にて養はるゝなり。吾人の懼るべきは肉體を殺して後に、何を爲せ能はざる人に非ずして、我肉體の外に我靈性の上にも權力を及ぼ

せる神に非ずや。而もこの神を恐れず、却て肉體の爲に生活問題を恐る、斯て生活問題の止みたるときに、吾人は何を以て我が頼となすべきか。所謂平生養ふ所は用ふる處に非ず、用ふる處は却て平生養はざる處なりとは、實にこの謂にあらずや。

憂慮は吾人に何をも與へず、唯天を匿して地獄を開くに止るのみ。我が衷心の至誠を發揮して、我が靈は我が神と交はり、斯て生活問題以上に生活するを得ば、天長地久、悠々として我心は天の樂園に遊ぶべきなり。脱俗の生涯とは則ちかゝる心得ある人をこそ稱すべけれ、常住不斷に生活以上の生活をなすものにあざれば、安そよく斯の如くならんや。

萬有界を主宰し給ふ神は、また人事を指導し給ふ天父なり。天空の鳥は何の不足をも訴へず、自由自在に翔け廻りて、楽しく天父の

趣味の涵養

保護を歌ふに非ずや。病ます餓えず常に嘯り常に歌ひつゝある天空の鳥を見て、吾人はこゝに天父造化の大能を默認すべきに非ずや

三四

又何故に衣のこを思ひ煩ふや、野の百合花は如何にして長つかを思へ、勞めす紡がざるなり。われ爾曹に告んソロモンの榮華の極の時だにも、其装束の花の一に及ざりき、神は今日野に在て明日塵に投入らるゝ草をも、かく裝はせ給へば、況て爾曹をや、嗚呼信仰うすべき者よ。然ば何を食ひ何を飲み何を衣んさて思ひ煩ふ勿れ。此みな異邦人の求る者なり、爾曹の天の父は凡て此等のものゝ必需こそを知り給へり。

六〇二八一三二

糧に充ちたる天地は、又美装豊かなるの天地なり、この天地の間に生を享るものは、脱俗の生涯に加へて又趣味の涵養をつとめざるべからず。見よ野の花は何を怨る色なく、美しく笑て天父の攝理を感謝せるに非ずや。詩人テニソンは破れたる垣根の一草花を詠じ、
「我若し爾を識るべくんば、我は宇宙と神とを識んと嘆じたりし如く、

片々たる一草花の笑るを見ても、こゝに天父の攝理と其恩寵とを悟り、我が心身をこれに委ねて、一切の煩悶と憂慮とを脱すべきなり。恰もかの立談の間に肝膽相照し、直ちに我が赤心を人の腹中に置が如く、天地神明に對して肝膽相照し、至誠相應じ、われ神の民となり、神われの父となり、新天新地爰にたちどころに成りたるものならずや。人と人との關係に於てすら、知遇の高潮に達せしとき、人生得意氣、功名復誰論と魏徵は歌ひたるに、況んや天の父なる神に對して一旦恩に感ぜるとき、利害得失も毀譽褒貶も物の數かは、活くも我が活るに非ず、死するも我が死するに非ず、真に此世に生れ來りたるを感謝し、如何なる運命に遇ひ、如何なる境遇に陥るも、欣び勇んで我が全力を盡し得るなり。人間茲に至りて真に人生の趣味を悟るものと云ふべきなり。

人としての本領

子として親に孝なるを得るは、親の慈悲に感ずるにあり、妻として夫に貞なるを得るは、夫の愛情に動さるゝにあり。友の信義に感じて、我は彼の親友となり得るが如く、天地の中、人生の間に、恩寵と攝理とを發見してこそ、我は至愛至仁の天父を認むるを得るなり。古今の美術品に接してすら、我に美術の素養なくば、其高雅なる傑作を鑑定し難し、況んや眞の眞、善の善、美の美なる天父の攝理とその恩寵とを感得するに於ておや。靈眼靈耳を開きて、見えざるに見、聞えざるに聞け、鳥歌ふ世なり、花笑ふ天地なり、親はいつくしみ、子は敬ふ、萬有と人情とは到る處に天父を顯しつゝあるに非ずや。衣食住は到底人の目的に非ず、生活問題は畢竟人生終極の問題にあらざるなり。

三五 爾曹まづ神の國を其義を求め、さらば此等のものは皆爾曹に加へらるべし。六〇三三

親の心を求むるは孝の至なり、夫の心を求むるは貞の至なり。孝と云ひ貞と云ふは、一種の形式を設け、必ずこれに據らざれば、其道を得たりと云ふを得ずとするは、孝貞の賊なり。人としての本領は、天意を求めて其義とする處を遵奉するにあり、形式にかゝらず又律法になすまず、たゞ赤子の心を以て天父の至愛を求め、又其他を問はず、何の憂ふる所なく、何の疑ふ所なく、澄然又淡然、我は唯我分を盡すのみ。然るに世人はこの理を悟らず、我々營々として求むべからざるものを求め、成す能ざるものを成し、居常意に充る處なく、危懼の念に驅れ、不安の念に充る、誠に憐むべきなり。先づその源泉を清ふせよ、されば其流自ら清まるべし。吾人先づ人間たるの本領を明かにすれば、衣食住の問題は自ら解決せらるべし。萬物の靈長たる吾人人間、豈天父の佑導なくして可ならんや。

安心立命

三六

是故に明日のことを憂慮ふ勿れ、明日は明日のことを思ひ煩らへ、一日の苦勞は一日にて足れり。 六〇三四

明日は何處までも明日なり、遂に今日となることなし、而も世人この遂に来ることなき、明日の事を思ひ煩ひて我今日の務を閑却し、却て小は一身一家より、大は天下國家の大計を過つに至る、愚これより甚しきはなし。リンコン曰はすや、多くのことを爲す秘訣は、一時に唯一事をなすにありと。斯て彼は國事多端の際、大統領の身として萬機を總裁し、寸毫も憂慮の風なし、人の怪みて其用意を問ふものあれば答へて曰く、予は橋に臨まざれば橋を渡らずと、これ事に先ちて豫め憂慮するの無用なるを示せしものなり。明日のことを憂慮ふ勿れとの誠のうちには、今日の務を勵むべしとの深意あるを忘るべからざるなり。

眞の安心立命はこゝにあり、樂んで天父の聖意を奉じ、勵て我平生の職務に従事し、敢て鼻より息の出入する人を懼るゝことなければ、又生活問題の爲に我心憂を惹るゝこともなきなり。悠悠自適、我心は神に歸し、神の靈は我を導き、神人合一の境に進むことを得ば、たとひ我身は地に住めども、我靈は毎に天に通ひ、俗塵又我を煩はすこと能はざるに至るべし。人生こゝに至りて眞に理想の生涯を歩めるものと稱すべきにあらずや。

第六章

同情の人

寛容の徳

三七

人を議すること勿れ、恐くは爾曹も亦議せられん、爾曹が人を議する如く己も議せらるべし、爾曹が人を量る如く、己も量らるべし。なんぢ兄弟の目にある物屑を視て、己が目にある梁木を知ざるは何ぞや。己の目に梁木のあるに、いひて兄弟に對て爾が目にある物屑を我に取せよと曰ふことを得んや。偽善者よ先づ己の目より梁木をされ、さらば兄弟の目より物屑を取り得るやう明かに見べし。

七〇一五

人を議するは己を議するなり、人を量るは己を量るなり。自己の缺點と過失とを省ることなくして、徒らに他を咎むるは、これ他人をはかる標準と、自己をはかる標準と、その尺度を異にするなり。

貨幣の偽造は天下の法律これを嚴禁し、二種の權衡と、二種の分銅はエホバに惡まる、これ他なし天下の標準を變更すればなり。他人の過失又は缺點を發見する時、自ら省て己を責め、敢て其過失を答めざるは寛容の賜ならずや。蓋し人間皆各過失あらざるはなし、人を答むるは則ち自ら答むる所以にして、人を恕すは則ち自ら恕す所以なればなり。人を指導するもの、自ら卒先して他を卒ゆれば、命する處なしと雖も、衆人唯々これに従ふ。寛容の徳あるものにあらざれば、人の風上に立つこと能はざるなり。

三八 犬に聖物を與ふる勿れ、また豚の前に爾曹の眞珠を投與る勿れ、恐くは足にて之を踏み、ふりかへりて爾曹を噬やぶらん。

七〇六

同情あるもの動もすれば、一種の感情に驅られ、前後の識別を爲し得ず、其志嘉すべしと雖も、其爲す所は事志と違ひ、ひとり

自ら失態を來すのみならず、亦他人をも過つに至る。この故に同情あるものは必ず常識を用ゐざるべからず、相手の何人たるかを辨へ、時機の如何なるかを稽へ、宜きに協ひて其爲す處を慎まざれば、我同情は其功を奏せざるなり。如何に自ら感ずる所ありとは云へ、時と處と相手とをばからず、凡ての人に對して我が所感所説所信を強ゆることは、ひとり其功を奏せざるのみならず、意外にも反對の結果を來すことあるべきなり、慎まざるべけんや。

三九 求よさらば與へられ、尋よ然ばあひ、門を叩よさらば開かるゝことを得ん。蓋すべて求る者は得、尋る者はあひ、門を叩く者は開かるべければなり。爾曹のうち誰か其子パンを求んに石を與んや、又魚を求んに蛇を與んや。されば爾曹惡き者ながら善賜を其子に與ふるを知、まして天に在す爾曹の父は、求る者に善物を與へざらんや。

七〇七一

反省と常識とこれを一貫するに至誠を以てせよ、同情の極致は人を相手とするに非ずして天を相手とするなり。人々相互の間に於てすら、真情と真情と、以心傳心、必ず相通するものなるに、なごか我至誠の天に通せざることあらんや。己の子を惜まずして、我等衆の爲に之を付せる者は豈彼にそへて萬物をも我等に賜はざらんや。あるが如く、天の父なる神はその子たる我等人間に善賜を與へ給ふとの聖意なれば、我等はその聖意に應へまつり、我が至誠を以て求めば、必ずや我願望を完ふすべし。「己の子を惜ずして我儕衆の爲に之を付せる者は、豈かれに併て萬物をも我儕に賜さらんや」求よさらば與へられ、而して吾人の願成るべし。至誠存する處、天佑必ず伴はん、天は自ら助くるものを助くと云ふに非ずや。

同情の原

四〇 是故に凡て人に爲られんと欲ふことは、爾また人にも其ごとく爲よ、是律法

と預言者たるなり。

六〇一二

眞の人格あるものは、赤心を何人の腹中にも置きて、これを心腹の友となす、これを以て凡ての人皆我が友とはなるなり。基督が其同志のものを指して「これ我兄弟、我姉妹、我母なり」と稱せられたるは則ち彼が萬民の救主たりし所以に非ずや。婦人に對しては婦人となり、嬰兒に對しては嬰兒となる、人格修養の至れるものに非れば安ぞよく斯の如くならん。斯の該博にして而も深厚なる同情は如何にして養ふことを得べきか、基督はこゝに其奧義を示して曰く「凡て人に爲られんと欲ふことは、爾また人にも其ごとくせよ」と、自己の心を推して他人に施し、他人の心を以て自ら省る。所謂春風を以て人に接ぎ、秋霜を以て自ら修むるものにして、學者には學者の如く、富者には富者の如く、貧者愚者それと接する人毎に、我を忘れて

其人の身となり、其人の爲を思ひ、而して其人の救を完ふするなり。かくてこそ水に入て水これを溺らし得ず、火に入て火これを焼くを得ず、白刃これに加つて刃先づ自ら折れ、こゝに不死不滅の者となるを得べけれ。

第七章

躬行の人

躬行

四一 窄き門より入よ。沈淪に至る路は濁く、その門は大なり、此より入るもの多し。命に至る路は窄く、その門は小し、其路を得るもの少なり。

同情の人はまた躬行の人たらざるべからず、人格修養のことは恰も高に登る如く、机上の空論に非ずして、實踐躬行、一步は一步より攀ち登りて、始めて其目的を達し得べきなり。墮落の道は歩みやすければ沈淪に陥り、向上の途は歩みがたければ、生命に導くなり。穿き門より入れよ、悔改の門は窄しと雖も、この門こそ廣き信仰の第宅に導くならめ。

窄き門に入るには衆人と共に相伴ふて入ること難し、獨立獨行、己れ一人して直進せざるべからず、これ第一の主意なり。窄き門に入るには唯眞心一つにて進まざるべからず、慾と伴ひ財を携へ名を提げて進むべからず、己を棄て家を擲ち十字架を取りて勇進せざる可らず、これ第二の主意なり。窄き門に入るには戦々恐々、少時も他を顧るべからず、天の外に望むべきものなく、道の外に歩むべきものなし、これ第三の主意なり。

交友論

四二

偽の預言者を誦めよ、彼等は綿羊の姿にて爾曹に來れども、内は殘き狼なり。これその果に由て知べし、誰か荆棘より葡萄をとり、藜藿より無花果を探ごをせん。凡て善樹は善果を結び、惡樹は惡果を結べり。善樹は惡果を結ばず、惡樹は善果を結ぶこと能はざるなり。凡そ善果を結ばざる樹は折れて火に投入らる。この故に其果によりて此を知べし。

七〇一五—二十

たゞに躬行の難きに止らず、交友のよろしきを得ることまた難し。我志は可ならざるに非ず、我往く途は正しからざるに非ず、されど我を導くものにして不信不義の友ならば、我は不知不識の間に途に岐路に迷ふに至るべし。而もこれら惡友は、必ずしも惡友の眞相を表はして來らず、否な往々親友の面貌を被りて我に來り、先づ我をして氣を許させて、而して後に我を陥るゝなり。されど斯る偽友、偽師の眞相を看破するは取て難きに非ず、退きて彼の平生を察し、その家庭を見、その素行を鑑みよ、斯てその人の實蹟如何を以て、その人物を判定すべし。人はたとひ一時を瞞着することを得るとも、永久に詐ることを得ず、數人を瞞着することを得るとも、萬民を欺くことを得ざるなり。善果を結ぶものは善樹にして、惡果を結ぶものは惡樹なり。惡樹は無用有害のものとして、遂に天の成敗を受け

ざるはなし、天網恢々粗にして洩べけんや。

四三

我を召て主よと曰ふもの盡く天國に入に非ず、唯これに入るものは、我天に在す父の旨に遵ふ者のみなり。その日我に語て主よ主よ主の名に託て教へ、主の名に託て鬼を追ひ、主の名に託て多く異能を行しに非ずやと云ふもの多からん。其時彼等に告げ、我嘗て爾曹を知す、惡を爲すものよ我を離れ去れと曰ん。

七〇二一—二三

人格は功名を以て磨くべきにあらず、財寶を以て飾るべきにもあらず、又學問、智識、辯舌を以てしても修めらるべきに非ず。人格はなすことに非ずして、あることなり、示すべきものに非ずして、實際するものなり。斯く人格を修養して、天父の聖意に遵ひ、漸次天父の完全に似るに至り、神人合一の實を擧げて遂に天國に入ることを得るなり。然るを世人これを察せず、徒らに語ることを多くし、行ふことを多くし、以て理想の境涯に進み得べしとして、揚々自得す。

安んぞ知らん自得は自欺に陥り、傲慢に流れ、身はたとひ善行をなすとも、心は遙に神より離れ、惡を爲す者よ我を離れ去れとの一喝に遇ふて遂に沈淪の域に墮落するに至る。されば如何なるものが、神の聖旨に遵ふものたるべきか、保羅曰く

たとひ我諸の人の言、及び天使の言を語るとも、もし愛なくば鳴銅や響く鉄の如し。たとひ我預言するの力あり、又凡の奧義と諸の學術に達し、又山を移すほどの諸の信仰ありと雖も、もし愛なくば數るに足ぬものなり。たとひわれ我凡の所有を施し、又焚るゝ爲に我身を予ふるとも、もし愛なくば我に益なし。

哥前一三〇—一三

神を愛し人を愛し、之が爲には我を忘れ我を棄るものに非れば、天父の聖旨に遵ふものと稱するを得ざるなり。

四四

第七章 躬行の人

八十四

是故に凡て我の言を聽て行ふ者を、磐の上に家を建たる智人に譬ん、雨ふり大水いで風ふきて其家を撞ぶも倒るることなし、これ磐を基礎と爲たればなり。凡て我の言を聽て行はざる者を、沙の上に家を建たる愚なる人に譬ん、雨ふり大水いで風吹て其家を撞ば終には倒てその倒覆大なり。

七〇二四―二七

人の人たる人格は、天父の聖意の上に築て、始めて完成せられたりと云ふべし。恰も千歳經る大磐石を基礎として、堅固なる建築物を建て得る如く、千古を貫きて、渝らず變せざる天父の聖意に基くものに非れば、人は永生の途に入ること能はざるなり。限ある人間が永生を得て、不朽不磨の域に進み、遂に亡びず滅せざるものとなるに非れば、人格の完成は遂に期すべからざるなり。磐の上に建つるも、砂の上に建つるも、建る家は則ち一なり。同く建物を立て、而もその結果に於ては大差あるなり。人生蓋しまた

これに類する者あり、天父の聖意を基とするも、自己の私慾を基とするも、同じ一生は送らざるべからず、汗を流し涙を流し時に或は血を流して迄も、我生存の爲には奮闘せざるべからず。斯て送り來れる一生涯は天父の聖意を基とすれば、永生に至る途を歩むこと、なり、自己が私慾を基とすれば沈淪に至るの途を踏むこと、なるなり。正義の報は永生にして、罪惡の價は死滅なり。しかも正義の生涯と罪惡の生涯と、其辛酸と艱苦と異なる處なし、否罪惡の生涯は苦み甲斐なきを以て、其悲しき苦は正義の樂き苦に比すべきもあらず。世の人果して何を苦んでか、しかく引き合はざる罪惡の生涯を送るか、惡人に平和あることなし、蓋し罪を犯す程勘定に合ぬことは又と世に非るなり、世人幸に猛省して可なり。

第八章

跋論

威格の權

四五

イエス此等の言を語り究たまへるとき、集りたる人々その教を敗きあへり、
そは學者の如くならず。權威を有るものゝ如く教へ給へばなり。

七〇二八一二九

山上の垂訓は基督が其弟子等に對して教へ給ひたる教訓に過ぎず、
されど一場の教訓が、たゞに當時の人々に甚大なる感化を興へしに
止らず、千九百年來東西萬國の人心を動かして、今尙その力を失は
ざるは何ぞや。他なしこれ基督の人格を経て出でし語なるが故に、
簡短なる教訓も無限の權威を有し、絶大の感化力を興へつゝあるな
り。言語に生命なく、文字に活力なし、唯活ける人は活ける教を述

べ、修養ある人格は、不朽の文字を傳ふるなり。基督の權威は則ち
人格の權威にして、聖書のうちに基督の語の能力ありしを誌せるこ
と、再三にして止らざるは則ち基督の人格の有力なりしことを證せ
るなり。基督は常に其使徒弟子等に對して活る力たりしに止らず、
又吾人に對しても活る人格の模範を示したり、否示したるのみなら
ず、更にこれが實行の力をも興へつゝあるなり。人格修養に志あり
て、其途を謬たざらんことを冀ふものは、須らく彼に來りて混々盡
ることなき生命の源泉に汲むべきに非ずや。

基督の人訓終

明治四十年十一月十二日印刷
明治四十年十一月十五日發行

基督の人訓與付
定價金十錢

著者 牧野虎次

發行所 東京市京橋區尾張町三丁目十五番地 福永文之助

印刷者 横濱市太田町五丁目八十七番地 村岡平吉

發行所 東京市京橋區尾張町三丁目十五番地 警醒社書店

印刷所 横濱市山下町八十一番地 福音印刷合資會社



不許
複製

牧野虎次先生著

新約聖書總論

菊判五百二十頁
四十一年二月發賣

神學博士湯淺吉郎先生述

舊約箴言講義

定價 上製六十五錢
並製五十錢
郵稅 八錢

希伯來文學の精華たる舊約聖書中の人生問題解釋を旨とし宗教的倫理を鼓舞して異彩を放てる者實に箴言の特色なりとす而して本書は單に其註釋たるのみならず各教訓を分類して講究の便を供せる所從來其比を見ず世の知者の言を學ばんとするものに大知の聰明を得悟したるに於て大に裨益する所なくんばあらず

原田助先生譯述

○耶穌之時代

定價 上製八拾錢
並製六拾五錢

附錄 日野眞澄先生編

郵稅 各八錢

猶太の地理、氣候及曆一斑

耶穌の性格を究めんとするものは須らく新約全書の記事の外別に其時代に溯りて特に世界の形勢制度文物思想を參照するの要あり蓋し二千年の星霜は人類の状態を一變して想像以外の懸隔を生ぜしめたればなり本書は獨逸の碩學サイデル博士の原書に基き補譯されたるものにして所謂隔靴搔痒の感を除きて單に新約聖書研究者に必要な知識を増進するのみならず津々たる興味を以て之れに親炙するの裨益を供せり斯道に志あるもの一讀せざるべからざる良書なり

紐育ユニオン神學校ホール博士著
同志社神學校教授日野眞澄先生著

○實驗的基督教

定價 六拾錢
郵稅 八錢

是れ北米宗教界の泰斗、紐育市ユニオン神學校長ホール博士が四年前パロース講座の擔任者として印度及び日本の諸大學府に於て講演せられたる者なり。博士が宗教上の意見の穩健にして其知識の該博なる殊に東洋の宗教に對して洞察力の深厚なるは茲に贅するを須めず。本書は實に博士の特長を遺憾なく發揮せる者なり。其説く所毫も基督教の枝葉に拘泥せず、主として現今思想界の立場よりイエスキリストの根本的宗教思想の解釋を試みたる者なれば苟くも意を宗教上の大問題に注ぐもの、必ず一讀せざるべからざる近代の名著なり。今回本社は同博士と師弟の因あり、且同博士が日本に於ける講演の通譯者たりし日野教授に請ひ之れを邦語に翻譯して爰に本書を發行するに至れり。行文流暢にして能く原著の意を得たりや否やは敢て讀者諸君の明斷に委ぬと爾云。

258
282

警醒社書店

親の心を求むるは孝の至なり、夫の心を求むるは貞の至なり。孝と云ひ貞と云ふは、一種の形式を設け、必ずこれに據らざれば、其道を得たりと云ふを得ずとするは、孝貞の賊なり。人としての本領は、天意を求めて其義とする處を遵奉するにあり、形式にかゝわらず又律法になすまず、たゞ赤子の心を以て天父の至愛を求め、又其他を問はず、何の憂ふる所なく、何の疑ふ所なく、澄然又淡然、我は唯我分を盡すのみ。然るに世人はこの理を悟らず、我々營々として求むべからざるものを求め、成す能ざるものを成し、居常意に充る處なく、危懼の念に驅れ、不安の念に充る、誠に憐むべきなり。先づその源泉を清ふせよ、されば其流自ら清まるべし。吾人先づ人間たるの本領を明かにすれば、衣食住の問題は自ら解決せらるべし。萬物の靈長たる吾人人間、豈天父の佑導なくして可ならんや。

安心立命

三六

是故に明日のことを憂慮ふ勿れ、明日は明日のことと思ひ煩らへ、一日の苦勞は一日にて足れり。 六〇三四

明日は何處までも明日なり、遂に今日となることなし、而も世人この途に来ることなき、明日の事を思ひ煩ひて我今日の務を閑却し、却て小は一身一家より、大は天下國家の大計を過つに至る、愚これより甚しきはなし。リンコルン曰はずや、多くのことを爲す秘訣は、一時に唯一事をなすにありと。斯て彼は國事多端の際、大統領の身として萬機を總裁し、寸毫も憂慮の風なし、人の怪みて其用意を問ふものあれば答へて曰く、予は橋に臨まざれば橋を渡らずと、これ事に先ちて豫め憂慮するの無用なるを示せしものなり。明日のことを憂慮ふ勿れとの誠のうちには、今日の務を勵むべしとの深意あるを忘るべからざるなり。